

『秋興』 杜甫

憂愁の詩人 望郷を詠う

杜甫が生まれたのは、唐の玄宗皇帝の即位の年、七二二年。亡くなったのは七七〇年である。わが国でいえば奈良朝のころに相当する。

玄宗皇帝の治世は四十五年の長きにわたるが、その前半、年号を開元と呼ぶ時期は唐王朝の最盛期であり(開元の治二十九年間)人々の生活は豊かで国も平和であった。しかしその後半、年号が天宝と改まるころから、政治はしだいに行きづまりを見せはじめた。

唐王朝の栄枯盛衰と共に杜甫もまた、歴史の波に翻弄された人生であったと言えよう。しかし儒学的な立場から詩においては、戦乱の国を憂い、人々の兵役、生活苦を悲しみ、又、我身の不遇、生活苦、病氣などに憂憤の情念にもえ、又、理想と現実の相違に苦しみつづけた。そこから生れる一語一語は私達の心に強く訴えてくるものがある。

又、李白の自由奔放で「天馬空を行く」様な非常にスケールの大きい、且つ浪漫的な詩に比して、杜甫の詩は社会の現実や自らの体験を、誠実に冷徹な写実主義の目をもって表現している。

永泰元年（七六五）成都を離れた杜甫が故郷に帰るべく長江を下り夔州きぼうに到着したのは翌年の晩春であった。杜甫はこの地で一年九ヶ月を過ごす、彼の人生で成都院花草堂の三年七ヶ月と、この夔州きぼうとが唯一の安息な日々であった。詩の内容も憂憤の情念から一喜一憂することなく、心奥深くしまい込み憂愁のうめきの中で望郷を詠う。それは私達の心に何とかしてやりたい、手をさしのべてあげたい、楽にしてやりたい、という同情が先にたつてやりきれない思をかきたてる。

この詩は杜甫五十五歳の秋の作「秋興八首其の一」である。（唐詩選では四首を選んで秋興四首という）

杜甫の詩型のうち、もっとも豊かな芸術性をもつのは七言律詩であり、李白と並び称する時は「李絶杜律」と称される。

秋興八首は律詩の代表作と言われているように島崎藤村評するところ、其の一が圧巻であると述べている。

残念おもに念う望郷のうた

秋興 杜甫

玉露凋傷楓樹林 玉露凋傷す楓樹の林

巫山巫峽氣蕭森 巫山巫峽氣蕭森

江間波浪兼天湧 江間の波浪は天を兼ねて湧き

塞上風雲接地陰 塞上の風雲は地に接して陰る

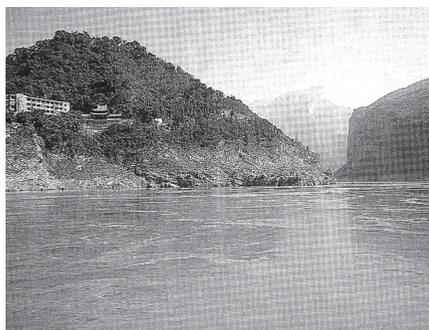
叢菊兩開他日淚 叢菊兩たび開く他日の涙

孤舟一繫故園心 孤舟一たび繫ぐ故園の心

寒衣處處催刀尺 寒衣處處刀尺を催し

白帝城高急暮砧 白帝城は高うして暮砧急なり

秋深く露は玉のように清らかだ。だが楓の林はすっかり傷み凋んでしまった。ここ巫山巫峽しんしん帯には秋の気がしんしんと満ちている。長江の波は天にとどかんばかりに湧きたち城塞の風雲は地にたれこみ、天も地も陰っている。



白帝城

成都を出て二年、今年も菊が咲き、それを見て去年流した涙をまた今年も流してしまった。それもなかなか果せぬ望郷の念からであり、岸につなげた一艘の小舟だけがその念をつないでいる。

秋も深まり、家々では冬の衣を急ぎ縫いととのえようとして衣をつくる粗衣を叩きなめす砧の音が暮れ残る白帝城の高みにひびいている。まるでわが故園||望郷の心をせかせるように。

巫山巫峡（教本地図参照）

巫山巫峡は杜甫が居を構えた夔州から、やや離れる。夔州の町から長江を約五キロ下ったところが三峡の第一の峡谷、瞿塘峡である。巫峡はさらに下流三〇キロばかり下ったところにある。この距離を舟で下ると、秋であるから長江の流量は少なく多分一時間に十数キロのスピードであったであろう。また諸々の時間的ロスを見ると巫山の町に到着するのに四時間ぐらいかかったと思われる。

この地は杜甫が生きた時代より千年以上も昔の故事にある「巫山の雲雨」の伝説が残されている所で作者にとって訪れてみたいと思っていた地であったろう。

鑑賞

一、二句は巫山巫峡にたちこめた秋冷の気配について

歌っているが、これは「静」的状态であり「水平」的な広がりを感じさせる。

三、四句は一転して、天にも届くほどに激しい浪をあげる長江と大地に低く垂れこめる風雲。これは「動」的状态であり、「垂直」的な広がりを感じさせる。「静」と「動」、「水平」と「垂直」この様に区対比することによって情景の心象が明確になってくる。

五、六句はそうした自然に触発された詩人の悲愁を歌う。五句の「叢菊両開」は成都を去って漂泊の旅に上ってから二度秋を迎えたことをいう。一度は去年（永泰元年）雲安において、そして今年（大暦元年）、夔州においてである。「他日」という語は過去の日についても、未来の日についても言えると解釈したい。したがって「他日の涙」は去年こぼした涙ともとれるし、昔を思っただけで現在の涙ともとれる。又来年も、の意味にとつて、苦しい生活をする上で流すであろう涙とも解釈できないか。六句は漂泊の旅の中で「孤舟に一に故園の心を繫ぐ」、残生はあとわずか、一日も早く故郷に帰りたい気持ちで孤舟に託す。七、八句は暮れ残る白帝城のふもとから響いてくる砧の音に冬着の支度の始まったことを想像したものである。

旅の空の身に晩秋のもの悲しさと地場に生きる人々の生活の匂いの中でより一層我が身の寂寥感と、人生の黄昏にさしかかって、なお故郷に帰り得ないでいる作者の不安を

象徴しているかのようなものである。

杜甫の意外性

典型的な官僚階層の家に生れた杜甫は科挙を受けて官僚になり王朝の為に力を尽くして立身したいと志ざした。が結局は科挙に受からず就職に失敗した。しかし安祿山の乱後、長安が回復されて一時期「左拾遺」の職に就いた。その時期の作に「曲江」がある。

当時、官僚の出勤は夜明け前で通常の政務は午前中には終るようであった。「左拾遺」の職が杜甫の理想と違っていたか、形ばかりの職務で無為な役であったか解らないが官僚としての意気込みが感じられない。「朝回日日曲江春衣」「每日江頭盡醉歸」「酒債尋常行處有」「人生七十古來稀」これらの語句に少し享樂的、退廢的な人生觀が見受けられる。杜甫の一生で比較的安逸な時期だったのだろうか。